

幼學綱要

漢文解

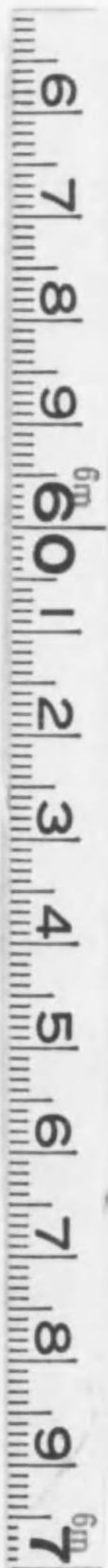
302-68



•1200501367685•

302

68



始

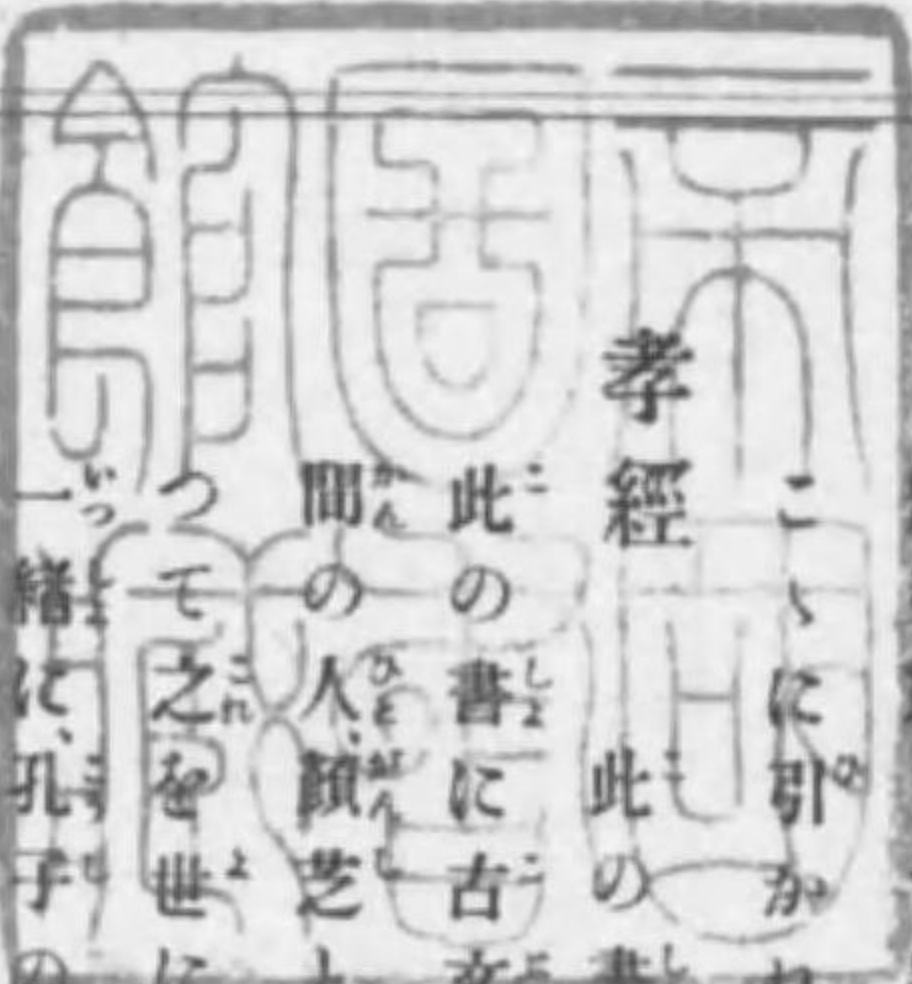


幼學網要

漢文解



幼學綱要漢文解



各章本文の前に引かれてある漢文に註解を加へる前に、その出典即ち書籍の解題を施して置く必要があるから、こゝに其の概略のことを述べておかう、さて

孝經

此の書は曾子の門人が孔子の言つたことゝもを書き記したものである。此の書に古文と今文と二様ある。秦の始皇帝の時天下の書を焚かせた際に河間の人顔芝といふものが深く此の書を藏しておいたが、顔芝の子顔貫が後に至つて之を世に出した。これを今文孝經といふのである。また尙書論語などと一緒に孔子の古宅の壁の中から出たものを古文孝經といふのである。そして、古文と今文とは篇章の次第及び文字の間に少しく異同がある。

禮

禮とは禮記の略稱で、此の書は支那古人の禮を論じた言葉と、其の儀節の書とを集めしめたもので、周の代か秦漢の代の初頃に輯められたものであらうといふ。漢の戴聖といふ人が、此の書を傳へたから、一名小戴禮とも、または戴記

とも名づけて居る。

論語

此の書は支那古代の聖人孔子が其の弟子や時人などに應答した言葉又は弟子達が相與に言つた言葉を記したものであつて孔子の死んだ後に門人等がこれを論纂したものである。だから論語と名づけたのである。

詩

詩とは詩經の略稱で此の書は支那の古代に采詩の官といふものがあつて民間の歌謡を採りあつめて其の風俗を観察し政治の得失を知るの參考としたもの及び朝廷に於て吉凶軍實嘉の五禮のある場合に或は盛徳を頌し或は功業を賛したるものなど殷周二代に互れる間の詩が凡そ三千餘篇あつたのを孔子が其の重複したものを去り禮儀に施すべく訓戒となるべきもの三百五篇を選び抜いたものである。

大學

此の書はもと禮記の中の一編であつたのを宋の司馬光といふ人が此を表出したものである。朱熹といふ人に至つて此の書を尊びて四書の一に加へたのである。

中庸

此の書は孔子の孫の子思といふ人の著した物で當時老子の學を盛であ

つたところから子思が之を憂ひて此の書を著し孔子の學のかたよらずして中庸であるといふことを説いたものである。此の書はもと大學と同じく禮記の中にあつたものであるが後に一卷となしたたのである。

孟子

此の書は周の孟子の著した物である。孟子は孔子より百餘年後の人で子思の門人に就て學んだのである。其の説く所は性善の二字を本とし仁義王道を行ふことを主張したものである。

書

書とは書經の略稱で此の書は虞夏商周の四代の政治をしるしたものを孔子が刪定したものである。もと尚書と稱へたものであるが後に至つて書經と稱へることとなつたのである。もと百篇あつたものであるが秦の時に焚かれて大に散佚したが漢の世に至つて秦の博士であつた伏勝といふ人が此の書を暗記して居たから之を學者に傳授した。これを世に今文といふ。また武帝の時に孔子の舊宅を壊つたところが其の壁の中から此の書若干卷を得た。これを古文といふのである。

易

易とは易經の略稱で一に周易とも稱へて居る。此の書は伏羲文王周公孔

子の四聖人の手を経て出来上つたものだと稱して居る。此の書にしるすとこ
ろは、天地間森羅萬象の變化消長交代する所以を示し、人間社會の治亂興廢生死
存亡利害得失の道をつまびらかにし、人の世に處し身を修める道を教へたもの
であつて、倫理道德の書であることは言ふまでもなく、支那古代の哲學思想の一
斑をも窺ふべき書である。

周禮 此の書は、一に周官ともいふ。周の代に周公旦が攝政して居つた六年間
に作つたもので、天地春夏秋冬にかたどつて官制を立て、其の職掌をくはしく記
したものである。

孝行第一

孝經曰夫孝天之經也地之誼也民之行也天地之經而民是則之

天^の之^の經^の地^の之^の誼^のとは、天地の道即ち自然と立つて居るよろしき條理であるとの意味で
ある。民^の之^の行^のとは、廣く一般の人間の行ふべき道であるとの意味である。
孝^{即ち}子^として親^に事^へることとは、天地自然に定まつて居る道であつて、人間として
當然^{たる}行^ふべき事^柄である。かやうに天地自然の道であるから人間たるものは、此の
天地自然の法則に依つて孝を盡すのである。

又曰夫孝德之本也教之所繇生也

德^{とは}、人間^の守^るべき正^しき節^義、よろしき道を意味した文字である。
子^{として}親^に事^へること即ち孝は、すべて人間^の守^るべき正^しき道^々の根^本となる
ものである。だから是^れ等^の正^しき道^々の事^を教^へる本^となるもの即ち此^の孝^の德^は
から始^{まつ}て、忠^節であるとか、信義であるとか、其^の他^の色^々の正^しき道^々は、顯^はれる
ものである。

又曰人之行莫大於孝孝莫大於嚴父嚴父莫大於配天

父を嚴にすとは、嚴はおごそかに又いかめしくすること、即ちどこまでも敬ひ事へてこれをおごそかなものにする意味である。こゝには父とのみあるがおのづから母といふことも罷つて居るものと見るがよからう。即ち單に親の意味に解すべきであらう。配天とは天は廣大無邊なものであつてこれを仰ぎ見るときは、誰でも一種崇高な念のおこるものである。それで親に對つても丁度天を仰ぐごとく、廣大無邊なもの、どこまでも尊び敬ふべきであるとの意味である。

人間としての行ひの中で親に孝を盡すのが第一の務である。その親に孝を盡すといふのは、最もこれを尊び敬ふのが第一である。これを尊び敬ふには吾々が常に高く仰ぎ見て崇高な念のおこるところの天を仰ぐやうに心得るのが第一である。

又曰身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也

人の子たるものは、此の身體は父母が生んでくれたものであつて、取りも直さず父母から貰ひ受けたものである。此の貰ひ受けた身體を毀したり傷けたりせぬやうに

するのは子たるもの、當然の義務であつて、此の身體を大切に守るといふことが乃て親に事へること、即ち孝の始めとなるのである。かやうに自分の身體を大切に、世に立つてゆくべき事を學び熱心につとめて立身出世して、こゝに始めて後の世までも名を残すやうになる。すると自然父母の名も立派に世の中に顯はれることとなる。此の心懸が實に子として親に事へる道の最後の目的である。

禮曰居所不莊非孝也事君不忠非孝也泄官不敬非孝也朋友不信非孝也戰陳無勇非孝也

親に孝を盡さんとするには、十分に慰め安せなければならぬ。これに慰安を與へようとするには、其の居所即ち家を身分相當に立派にしなければならぬ。若し身分に似合しからぬやうな醜い家に親を住はせるやうでは、孝の道に缺けて居る。主君に事へて忠義を盡さぬやうでは、これも孝の道には缺けて居る。其の身官吏となつては、其の心行ひともに恭敬でなければ、これも孝の道には缺けて居る。友達と交るに信義を缺くやうなことで、これも孝の道には缺けて居る。また主君の爲に戰場に出て軍するやうな場合に當つて臆病な心を出して卑怯な振舞をするやうなこと

があつては、これも孝の道に缺けて居る。そも孝は人間の履み行ふべき善良なる道の本となるものであると同時に、其の行ひが一つでも道に違ふやうなことがあつては、孝の道に取つて缺けるところがある譯である。

又曰凡爲人子之禮冬溫而夏清昏定而晨省在醜夷不爭

人の子として親に事へる禮は、親に對して冬は衣食住ともに温にして、これを慰め、また夏には衣食住ともに清くして涼しいやうにする即ち四季をりくくの寒暖につけて衣食住に注意し、朝夕に心を用ゐて機嫌を伺ふべきである。また外に出て、つまり人間どもの間にまじることがあつても、それらの者と益もないことに諍などをして、身に禍を受けるやうなことがないやうに、萬事につけてよく／＼慎むべきである。

又曰孝子之有深愛者必有和氣有和氣者必有愉色有愉色者必有婉容孝子如執玉如奉盈洞洞屬屬然如弗勝如將失之嚴威儼恪非所以事親也

人の子として親に事へるのに、真底から親を大切にすることのあるものは、自然その心

だてがやはらかなである。心だてのやはらかなものは、自然その顔付もおだやかで、樂しさうな氣色のあらはれるものである。かやうな人は、また必ず其の身の姿振舞にも、おのづからやさしい氣色のあらはれるものである。かういふ風であるから、孝心のあつた人は、親につかへることがまことに心やさしく丁寧で、丁度立派な玉を手を持つて居る時のやうに、または物の一杯に満ちてをる器を捧げて居る時のやうに、これを落すまい、これを零すまいと、慎むやうに心の底から敬ひつゝ、しみて決して荒々しい顔色を見せたり、振舞をしたりするものではない。されば荒々しい顔付をしたり、きびしい行ひをしたりするのは、親に事へる道ではない。親に孝を盡さんとするものは、どこまでも、やさしくおだやかに仕向けなければならぬ。

論語曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也君子務本本立而道生孝弟也者其爲仁之本與

孝弟は孝悌と書いたのも同じ意味であつて、父母に事へて孝を盡し、兄弟の間の睦じいのをいふのである。上とは、すべて自分より目上のものを指す稱で、大きく言へば天子小くいへば兄や友達、の年長をもかくいふのである。君子とは、心だての善良に



して行ひの正しいものを稱する語である。仁とはこゝでは人として行ふべき道の最も大切なるもので道徳の樞機ともいふべき意味である。人として其の生れつきの性質の正しくして親には孝を盡し兄弟相睦び親しむものは決して目上の者に對し無禮をなしこれをないがしろにするやうなことはない。またかやうに目上に對して禮を守る程の人は決して人道をみだり世の中を亂すやうなことはした試は未だ曾てない。この心この行ひは實に君子といふべきである。世に君子と言はれる程の者は必ず道徳の本をつとめ行ふものである。本をつとめ行へば其の末々の道々はおのづから義理に合つて行はれるものである。これを以て見れば父母に孝にして兄弟相睦び親しむといふことは道徳の根本となるものであらうか。といふので孝の尊ぶべきことを説いた語である。

又曰事父母幾諫見志不從又敬不違勞而不怨

幾諫とはおもむろに諫めるといふ意味でこゝでは親の怒に觸たないやうにしづかに諫めてみることを言つたのである。若しも親のせられた事や言はれた事が誤であると思ふやうなことのあつた場合に

は其の怒に觸れないやうに折を見はからつてしづかに之を諫めて見るべきである。諫めて用ゐられればよいが若しも用ゐられぬ場合には決して不平を言つてはならぬ。やはりどこまでも敬ひかしづきて其の心に違はぬやうにし身を勞し働いても決して親を怨むやうな心を持つてはならぬ。

詩曰哀哀父母生我劬勞○哀哀父母生我勞瘁○無父何怙無母何恃
出則銜恤入則靡至○父兮生我母兮鞠我拊我畜我長我育我顧我復
我出入腹我欲報之德昊天罔極

哀○哀とはかなしむありさまを形容する語であるがこゝでは自分を育ててくれた親の恩を思ふあまりに發した語である。劬○勞とは骨折りつかれることまた病み勞れること。勞○瘁とはこれもつかれわづらふこと。無○父○何○怙○無○母○何○恃○の怙恃の二字を父母の意味に轉じ用ゐたのは此の文に本づいたのである。拊○我○の拊は衣服の上から軽くたくくことで即ち子をいだいて衣服の上から軽くたくいてあやすのを言つたものである。出○入○腹○我○とは外へ出るときもまた家に在るときも自分を懐にしてといふ意で何時も放さずといふ譯である。昊○天○はこゝでは大空の意味である。

有難きのあまりにかなしくも思はるゝことであるよ。父母は自分を養ひ育てる爲にはどれだけの苦勞をせられたことであらう。實に容易ならぬことである。自分を養ひ育てる爲に其の身をわづらひつかれるまでに骨折られたのである。若し父母がなかつたならば自分は何を待みにしよう。これを思へば外に在つても家に居ても心が安らかでない。父母は自分を生んでくれてさうして自分を一人前になるまで育て上げてくれたのである。どうかしてこの廣大なる恩に報いたいものであるとは思ふけれども、其の恩が天空のやうに果てしもなく廣大なので、報いやうもないことである。

大學曰爲人子止於孝爲人父止於慈

こゝにも父とのみあるけれども前の孝經の文にもあつたやうに、おのづから母をも含めて、父母と解すべきであらう。慈は、いつくしみである。人の子となつては、親に孝をつくすのが第一のつとめである。人の親となつては、其の子をいつくしみ恵むのが第一のつとめである。かやうにして子は親に孝を盡し親は子をいつくしんで互に敬愛の心を以て盡したならば實に親子の間はうつくし

くも、また頼もしいものである。

中庸曰夫孝者善繼人之志善述人之事者也

親に事へて孝をつくすといふことは、取りも直さず正しく前人のこゝろざしを繼ぎ素直に前人のせられた事を手本として行ふ譯のものである。

孟子曰舜盡事親之道而瞽瞍底豫瞽瞍底豫而天下化瞽瞍底豫而天下之爲父子者定此之謂大孝

舜とは、支那古代の聖王、有虞氏の號である。瞽瞍とは、舜の父である。瞽も瞍も、ともに目無き人をいふので、舜の父は目は明いて居たが善惡の道理を分別することの出来ない人であつたから、時の人がこれを名づけて瞽瞍と言つたのである。舜の父は世間からめくらだと字せられるほど、譯のわからぬ無道の人であつたが舜は、よく之に事へて普通の人の及びもならぬ程の孝を盡して、此の頑迷の父を慰めた。爲にかほど無道の父も、大に心慰められた。此の徳に依つて天下は舜を仰いで聖王となし、よく世が治まつた。かやうな譯で、父は如何に無道であつても、子たるものは孝の道を盡すべきであるといふことが舜の行ひの上に於て明かに示され、親子の道

がおのづから立つたのである。實にこれを大孝といふべきである。

忠節第二

書曰爲下克忠。

下とは、こゝでは、主君に仕ふるもの即ちひろく臣下といふ意味である。臣下となつて、主君に仕ふるものは、其の主君の爲によく忠義を盡すべきである。

又曰世篤忠貞服勞王家。

世とは、世俗即ち世間一般をいふ。忠貞とは忠義忠節などいふも同じことで操たゞしく、君に仕ふるに、まめやかなのをいふのである。王家とは、主君の家即ち朝廷といふのと同じことである。服勞とは、勞務に服すること即ちよく仕ふるといふことである。

世俗一般に忠義の心があつて、朝廷の爲によくつとめ盡すといふこと。

詩曰夙夜匪解以事一人。

夙夜とは、夙は朝早き意で、こゝでは即ち朝の義である。それで夙夜といへば、朝夕と

いふも同じことで、一日は朝に始まり夜に終るものであるから夙夜といへば、乃て日一日といふことになる。そしてこゝに夙夜即ち一日といふことを言つて、乃て毎日々々といふ意味になるのである。一人とは、天子の事であつて、天子は、天に二日なきが如く、必ず一國一人のものであるから、單に一人といへば、直に天子を指す稱である。日がな一日、それを繰返して毎日々々、少しも懈りたゆむことなく、天子の爲に仕へ奉るべきである。

論語曰事君能致其身。

主君に事へては、其の身をかへりみず命までもさへげて忠を盡すべきである。

又曰君使臣以禮臣事君以忠。

主君となつて、臣下を召しつかふには禮を厚くして、よくこれをいたはるべきである。また身、臣下となつて、主君につかへるには忠義を盡すべきである。

又曰勿欺也而犯之。

臣下となつて、主君に仕ふる者は、如何なる場合でも、其の時一時の都合を計らはむが爲に、偽を言つて、其の場をつくり、主君を欺くことは、決してならぬ。若し君主の非

なる時に臨んでは、面を犯して之を諫めるのが臣下たるものゝつとめである。主君を欺いてまで従ふのが忠義といふべきではない。

又曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與君子人也。

六尺之孤とは、親を失うた幼児即ち孤兒である。百里之命とは、使命を帯びて遠方に使することである。大節とは、非常な場合をいふ。

人の主君たる者が、將に死せむとする時に臨みて、嗣子を、其の臣に託して、これが養育傳導の事を依頼せられた場合に、臣として其の遺命を奉じ、其の嗣子を養育傳導して完全に主君の跡を繼がしめるやうなる者、または主君の命を奉じて遠方に使して、よく使命を果し、萬一事の非常な場合に立至つても、志を變へず、節を曲げず、正義一途にやりとほすやうな者は、これを君子といふべきであらうか。さやう、其のやうな人は君子といふべきである。

孝經曰、以孝事君則忠。

親に孝を盡すと同じ心懸を以て君に事へたならば、即ち忠となるのである。

又曰、君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡。

上とは、臣を下といふに對して主君を稱する語である。將順とは、増進すること、即ち進めますことである。匡救とは、たゞしすくふこと、即ちとゞめようとするものである。

君子たるものが主君に事へては、進みてはどうかして主君の爲になるやうにと、いつも心懸けて忠義を盡さうとのみ思ひ、また退いて己が身をかへりみてはどうか過ちをすまいとのみ注意するのである。そして其の善いところはますます之を進め増させようとする、其の悪い處は之をたゞして、ふたゝびすまいと、心を用ゐるのである。

大學曰、爲人臣止於敬。

人臣とは、臣下といふのと同じことであつて、主君のことを、人主または人君などいふに對しての語である。敬とは、こゝでは、君の爲に善を進め、惡をとゞめるといふ意味である。臣下たるものゝ務めは、さまざまあるが、終局は、君の爲に善を進め、惡をとゞめるとい

ふのが最後の務めになるのである。

孟子曰責難於君。謂之恭。陳善閉惡。謂之敬。吾君不能謂之賊。

君にして若し非行のあつた場合は、これを諫めたゞすのを恭といひ、また君の爲に善を進め悪をとゞむるのを敬といひて、ともに臣たるものゆゑ君に仕ふる道である。然るに君たるものが、これを用ゐないやうであるならば、これを賊といふべきである。

又曰君子之事君也。務引其君以當道。志於仁而已。

引とは、みちびくことである。道とは、人の行ふべき義理をいふのである。君子たるものは君に仕へては、つとめて其の君の爲に善を進めて、これを導き、そして人たるべきものゝ行ふべき道を履み行ふといふことに至つては、仁を行はうと志すのである。

和順第三

詩曰關關雎鳩在河之洲。窈窕淑女君子好逑。

關關とは、やはらぎ鳴く聲をいふ。雎鳩はみさごとといふ鳥のことである。窈窕とは

しとやかな貌をいふのである。淑女とは善良なる婦人の意味である。好逑とは、よろしきつれあひといふことである。

やはらぎ鳴くみさごとといふ鳥は雌雄むつまじくして、河洲に居るものである。しとやかにして善良なる婦人は、君子の妻として最もよろしきものである。

又曰妻子好合如鼓琴瑟。

琴瑟の琴も瑟も、ともにコトである。夫婦の仲むつまじきは、丁度琴瑟をうまく合奏したやうなものであるといふので、琴瑟相和すといふので、直に夫婦の仲むつまじきことに言ひならはして居る。妻子とは、こゝでは家庭といふと同じ意味である。家庭のよくとのひて楽しいのは、丁度琴瑟をうまく合奏したやうに、夫婦の仲むつまじいのが第一である。

又曰琴瑟在御莫不靜好。

琴瑟在御とは、琴瑟相和すること、即ち夫婦の仲のむつまじきをいふのである。夫婦の仲らひむつまじく、よくとのふのは、まことによろしいものである。

易曰女正位乎内、男正位乎外、男女正天地之大義也。

位とはそれ〴〵己のつとむべき職務の謂である。

女は家庭の人となりてよく内を治め、男は外に出でよく己の職を全うすべきである。かやうにして男は外を理め、女は内を治めるといふことは、天地自然の道である。

又曰、王假有家、交相愛也。

假有家とは、宮室にとゞまることをいふのである。

王の宮室にとゞまりて出ないのは、王は后を愛し、后は王を愛して互に相愛するのである。

禮曰、禮始於謹夫婦。

夫婦の間は相愛してみだらにならぬやうに謹むべきである。それで禮の本は夫婦の間を謹むのに始まるのである。

又曰、和順積中而英華發外。

和順とは、やはらぎしたがふことで、婦徳の第一である。英華とは、もと草木の花の意味であるが、轉じて人の才智をいふこととなつたのである。

中に和順の徳を積んで、はじめて才智が外にあらはれるものである。

又曰、夫婦和家之肥也。

一家の中で夫婦の仲のむつまじくないのは、實に其の家の爲にどれだけの不利があるか知れない。それに引換へて夫婦の仲の睦じいのは、實に其の家の利益である。

孟子曰、男女居室、人之大倫也。

男女とは、こゝでは夫婦の意味である。

夫婦の一家内に居るといふことは、人倫としての道である。

中庸曰、君子之道、造端乎夫婦、及其至也、察乎天地。

端とは、物事の始めをいふのである。

君子の道といふものは、まづ其の始めは夫婦の間を正しくするといふことよりして、いろ〴〵の徳を積み、其の最後に至つて、天地自然の徳と感格するやうになるのである。

友愛第四

詩曰、兄弟既翕、和樂且湛。

兄弟一所に集まりて相和して楽しむ。

又曰宜兄宜弟令德壽豈。

令徳は美德といふも同じことである。壽豈とは命ながくして和樂の盡きぬことをいふのである。

兄弟の間のむつまじきものは其の美德の爲に和樂久しくしてかぎりなからう。

又曰常棣之華鄂不韡韡凡今之人莫如兄弟。○死喪之威兄弟孔懷原

隰哀矣兄弟求矣。○脊令在原兄弟急難每有良朋況也永歎。

常棣之華は庭梅の花である。鄂とは外にあらはるゝこと。韡韡とは色香のうるはしいことをいふのである。死喪之威とは人の死んだ際といふことである。原隰とはたゞ原といふも同じことである。脊令は今専ら鶴鶴と書いて鳥の名である。庭梅の花はその色香がまことにうつくしい。この一樹から生じて居る多くの花のうつくしいのを見てまことに兄弟の多くあることのたのもしいことを思ふ。人の死んだ場合に當つて兄弟の上をひとしほ思ふことである。その死人を葬る野原に多くの人が集つて弔ふのを見てよい。兄弟の上が思はれる。

鶴鶴といふ鳥が原に居る。この鳥は急難に遇つた場合ひとく兄弟を慕ひ求めるものである。そのやうに人に於てもよしや極親しいよき友があつてもさすがに兄弟にはまさらぬものである。

又曰陟彼岡兮瞻望兄兮兄曰嗟予弟行役夙夜必偕上慎旃哉猶來無死。

行役とは徴されて兵となりて戦地に赴くのをいふのである。

岡の上へのぼつて兄をのぞみ見るに兄のいふには、あゝ吾が弟は兵に徴されて戦場に赴くのである。がどうか無事で居てくれよめでたく歸つて来たならば朝夕起居を共にして楽しもうものを。どうかよく身をつゝしんで死なずにふたゝび歸つて来てくれよ。

又曰有杖之杜其葉湑湑獨行踽踽豈無他人不如我同父嗟行之人胡不比焉人無兄弟胡不飲焉。

杖之杜とは杖は丈と同じでたけの高い杜の木といふこと。湑湑とは盛なる貌をいふ語である。踽踽とは獨り行くものさびしい貌をいふのである。同父とは父を同

じくすること、即ち兄弟といふ意味である。

丈の、高い杜の木がある。其の葉はまことによく繁つて盛である。といつて、兄弟の多いといふ意を寓したのである。心さびしく獨り道を行くに兄弟にあらざるところの他人はあるが、さて道連として相共にたすけ慰むには兄弟にまさるものはない。

書曰、友于兄弟、克施有政。

兄弟の間むつまじくして、而も其の心を以て政をなす上に施すべきである。

論語曰、兄弟怡怡。

怡怡とは、やはらぎ樂しむ貌にいふ語である。

信義第五

論語曰、與朋友交、言而有信。雖曰未學、吾必謂之學矣。

友達と交はりて信を重んずるものがあるならば、よし其の人は未だ徳を修むるの道を學ばないといふとも、孔子自分は既に徳を修むる道を學んだ人であると斷言する。それは行ひが既に徳を修むるの道に適つて居るからである。

又曰、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎。

他人の爲に事を謀つては忠ならずしてよからうか。否々必ず忠ならねばならぬ。友達と交はつて、信ならずしてよからうか。否々必ず信ならねばならぬ。

又曰、朋友信之。

友達の間は相互に信義を重んじなければならぬ。

又曰、朋友切切悃悃。

切切とは、至つて親切なことをいふのである。悃悃とは相共に、はげみあふことをいふのである。

友達の間は、相互に十分に親切を盡しあつて、そして相共に勵みあふべきである。

又曰、忠告而善道之。

善道とは、よきにみちびくことをいふのである。友達の間は、よく忠告して、これを善にみちびくべきである。

又曰、人而無信、不知其可也。大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。

輓は、大車の輓の端にあつて衡を持するものである。輓はよこがみといつて、これも車の輓の端にあつて衡を持するものである。

人にして真心がなかつたならば、どうなることであらうか。車に於ても、其の通りで、若し大車に輓がなく、小車に輓がなかつたならば、どうして之を輓いてゆくことができようか。決して輓いてゆけるものではない。それで、真心なき人は、丁度よこがみのない車のやうなものである。

又曰、信近於義、言可復也。

信にして而も義に近く、そして一たび言つたことは必ずこれを履行すべきである。

又曰、民無信不立。

民に真心がなければ、社會は立ちゆくものでない。

又曰、信以成之、君子哉。

事をなすに真心を以てするとは、さても一君子であるわい。

孟子曰、責善、朋友之道也。

友達に善をなせよとすゝめ責めるのは、友達たるものゝ道である。

大學曰、與國人交、止於信。

國人とは、國內の人民といふことで、こゝでは、單に人の意と見るがよい。人とまじはりては、信義を重んずるのが第一である。

禮曰、合志同方、營道同術、並立則樂、相下不厭、久不相見、聞流言不信、其行本方立義、同而進、不同而退、其交友有如此者。

同方とは、嚮ふところを同じくすること。流言とは、世間の取沙汰をいふ。志を同じくして嚮ふところを同じくし、道を營みて術を同じくし、與に立身しては、樂しみ、若し、相與に下ることあるも、更に疎まず、長い間、相見ずとも、世間の取沙汰などを聞いて、友の上を疑ふやうのことなく、其の行ひ、真心も、嚮ふところに本づいて、義を立て、與に同じ地位を得ては、まず一進み、友の方がおくれるやうならば、退く、其の友の爲に厚きこと、かほどのものもある。

又曰、交遊稱其信也。

友と交るには、信義を重んずるのが第一である。

勤學第六

中庸曰尊德性而道問學。

德性とは徳義にあつき心をいふのである。問學とは道を問ひまなぶことで、學問といふのも同じことである。

徳義にあつき心をたつとびて、學問につとむべきである。

又曰博學之審問之慎思之明辨之篤行之。

博く物を學び、詳しく問ひ、つゝしんで之を心の中に思ひ考へて、學び問うた事どもをよく辨へ、これを實際にあつく行ふべきである。

又曰有弗學、學之弗能、弗措也。有弗問、問之弗知、弗措也。有弗思、思之弗得、弗措也。有弗辨、辨之弗明、弗措也。有弗行、行之弗篤、弗措也。人一能之、己百之。人十能之、己千之。

未だ師に就いて學ばないことはある。が、一旦學んだ上は、これをよく爲なければならぬ。未だ師に就いて問はないことはある。が、一旦問うた上は、これを十分に呑

込まねば已まない。未だ心に思考せぬことはある。が、一旦思考した上は、これを悟り得なければ已まない。未だ辨へないことはある。が、一旦辨へた上は、これを明白にしなければ已まない。未だ行はないことはある。が、一旦行つた上は、其の行を篤くしなければ已まない。かやうな風に勉強するといふことを、若し他人が一度これをよくしたならば、自分は大につとめて、其の事を百度も行はう。他人がこれを十度よくしたならば、自分は更につとめて、千度よくしてみよう。

論語曰學而時習之不亦說乎。

學んだだけではなくして、一旦學んだことを時々復習して、これを研究するといふことは、實に楽しいことではないか。

又曰學而不思則罔思而不學則殆。

學問をしたばかりで、これを實際の上に引當て、思考して見なければ、何の役にも立たぬ。それでは物を學んだ効もないことである。また學問をせずして、思考工夫ばかりするのは、更に物事の義理が明らかでないから、これは危いものである。

又曰篤信好學守死善道。

君子の道を學ばんとすれば、篤く信じて學問を好み、斃れて後に已むといふ程の決心を以て善道を行ふべきである。

又曰學如不及猶恐失之

學問に志すものは、丁度先に走つてゆく物を追ふやうなもので、なかく及び難いものである。それ故に、やゝもすれば遂に遅れて、其の物を見失ふことのあるやうに、道を取外しはせぬかと、それを恐れるのである。

又曰譬如爲山未成一簣止吾止也譬如平地雖覆一簣進吾往也

一簣とは、簣はもつことといふもので、土を盛る道具である。それで、こゝでは、一もつこの土といふ意味になるのである。學問の成ると成らぬとを物に譬へて言うて見れば、其の成らぬといふのは、丁度山をこしらへるやうなものである。今少しで成るところを、擔んで簣に一杯の土を運ばずに止めるのは、これは出来ないのではなくて、つまり自分がしないのである。其の成るといふのは、丁度平地の上に土を盛るやうなものである。たとひ簣に一杯の土でも、そこへ置けばそれだけ高くなる。これは自分がつとめてするのである。大き

なる希望を懐いて、どんく進んでいつても、大抵中途で、または今少しといふ所で、びるみの出るものであつて、なかく成し遂げ難いものであるが、又さほど大きな希望を最初から懐かずに、手近なところから、一步步と進んでいつて、いつか知らず學問の奥に到達するものもある。されば學問をするには、倦まず、擔まず、始終熱心に秩序を趁うて進むべきである。

又曰吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如學也

吾とは、孔子自らをさして言つた語である。嘗とは、かねてとか前方とかいふ意味である。

自分は、かねて日一日物を食はず、また夜一夜寝ないで、精神をこらして考へて見たところ、何が何の得るところもなく、全く無駄骨折に終つた。こんな益もないことに苦心するよりも、矢張順序を追うて學ぶに越したことはない。

又曰博學而篤志切問而近思

學問をするには、博く知識を得ることを考へて、そして篤實に其の事にこゝろざし、道を問ふには十分にこれを審にして、常に心の中に工夫すべきである。

又曰好仁不好學其蔽也愚好知不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也賊好直不好學其蔽也絞好勇不好學其蔽也亂好剛不好學其蔽也狂

仁とは、いづくしみである。愚とはおろかしきものである。知は、智と同じことである。事を辨へる心のはたらきである。蕩とは放縱の意味で、わがままといふことである。信とは、真心といふことで、偽りあざむかぬこと。賊とは、善をそこなふものである。直とは、ずなほなることで、即ち正直なことをいふ。絞とは、しめくゝること、即ちきびしいといふ意味である。勇とは、たけんしくいさましいことをいふのである。亂とは、世の中または一社會をかきみだすことをいふのである。剛とは、つよいことをいふのである。狂とは、ぐるふことをいふのである。

道を學ぶのは、物事の條理を明らかにするが爲のものであるから、人たるものは必ず學ばなければならぬ。それで、仁を好んでも、學が伴はなければ、それは條理の立たぬ愚かなものとなつてしまふ。智を好んでも、學が伴はなければ、それも條理の立たぬがまゝなものとなつてしまふ。信を好んでも、學が伴はなければ、これも條理の立たぬ、却つて他に禍するものとなつてしまふ。直を好んでも、學が伴はなければ、これも

條理の立たぬ、たゞきびしいものとなつてしまふ。勇を好んでも、學が伴はなければ、却つて世を亂す本となるに過ぎぬ。剛を好んでも、學が伴はなければ、これも條理の立たぬ、狂氣じみたものとなつてしまふ。つまり、仁といひ、知といひ、信といひ、直といひ、勇といひ、剛といひ、何れも人の備ふべき徳ではあるが、これに條理を明らかにする學が伴はないと、役に立たぬのみならず、却つて己が身または他に對して禍することになつてしまふのである。

易曰天行健君子以自彊不息

天行とは、日月の廻り行くことである。日月の運行することは、常に變ることがない。その如く、君子たるものは、始終學につとめて已まないものである。

禮曰俛焉日有孳孳斃而後已

俛焉とは、孜孜としてつとめるさまをいふ語である。孳孳とは、これも餘念なくつとめるさまをいふ語である。斃れは、死ななうたはなうた。禮に志すものは、毎日々々一生懸命につとめ勵みて、斃れて後に已むの覺悟を持つべ

きである。

立志第七

論語曰吾十有五而志于學。

吾とは孔子自らをさしていつた語である。十有五とは十五歳といふことである。自分十五歳の時に始めて學問に志した。

又曰志於道據於徳依於仁游於藝。

學問に志して徳義仁恵をたつとびそして高尚なる藝を以て樂しむ。

又曰朝聞道夕死可矣。

朝の間に道德の説を聞いて之を悟ることを得たならば其の暮にはよし死ぬるとも悔ゆることではない。

又曰士志於道而恥惡衣惡食者未足與議也。

士とは男子といふのと同じことである。男子として一旦徳義の道にこころざしながら其の身に纏うてゐる衣服の醜いこと

や食物のまづいことなどを恥づるやうなものは、まだ與に事を語るに足らぬ輩である。

又曰三軍可奪帥也匹夫不可奪志也。

三軍とは、周の制に一萬二千五百人を一軍として、大國は三軍を出すべきものと定められた。それより轉じて、單に大軍のことを三軍といふことになつたのである。帥とは、軍の大將をいふのである。匹夫とは身分いやしき男子をいふ。

よし大軍に向ふとも、其の將は捕へ得ることも出来よう。が、人の意志はそのものゝ自由にして、他人これを如何ともすべからざるものである。

又曰志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁。

志士とは、國家の爲に盡す志のある人をいふのである。仁人とは、仁者といふと同じく、いつくしみの心ある人である。

志士とか仁人とか言はるゝ程の者は、己が命を惜しむ爲に、仁義の道に外れるやうなことは決してしないものである。自分の命を捨てても、仁義の爲には盡すものである。

易曰内難而能正其志

志あるものは事情いかに苦しいことがあつても決して志を變へることはなくよく其の志行ひを正すものである。

書曰功崇惟志

事をなして成功するその功のたふといのは其の成つた結果がたふといのではなくて其の始めに於てなきむとする志がたふといのである。

禮曰身可危也而志不可奪也難危起居竟信其志

身を危くすとは非常な場合に處して身に危難の迫るのをいふのである。非常なる場合に臨んで其の身に危難が迫らば迫れ決して志を變へるものではない。身は如何に危くとも遂には初一念を貫かでは已まない。

孟子曰彼丈夫也我丈夫也吾何畏彼哉顏淵曰舜何人也予何人也有為者亦若是

彼とは自分以外の人をさして言ふ語でこゝでは假に設けた語である。丈夫とは堅

固なる志を持つる男子をいふ。顏淵は周の時代の人で名を回といつた。孔子の門人であつて最も徳望高く師の孔子も常に之を重んじてゐた人である。二十九歳にして髪盡く白く三十歳にして死す。其の死するや孔子哀惜止まずして曰く天子を喪す」と。以て其の高徳の士であつたことを知るべきである。舜は支那古代の聖人で堯の後を承けて帝王となつた人である。予とは己れみづからをさしていふ語である。

彼れは丈夫である。が我も亦丈夫である。して見れば吾は決して彼を恐るゝものではない。顏淵といふ人の言ふには聖人であると言はるゝ舜はどんな人であつたか吾はどんな人間であるか道に志し善をなさむと思ふに至つては少しも異なるところはなない筈である。と其の言の壯なることを思ふべきである。それ己れ爲すところ有りと堅固なる志を持つる程の者はまた其の自重するところはこんなものである。

又曰士何事孟子曰尚志

男子たるものは何を以て己が任とすべきであるかとの間に孟子答へて其の志をたつとくすべきである。

誠實第八

中庸曰誠者天之道也誠之者人之道也

天之道とは自然に定まれる正しき道理といふことである。誠といふものは自然に定まつて居る正しい道理であつてこの誠を心に思ひ行ひに顯はすといふことは人として當然履むべき道である。

又曰誠則明矣明則誠矣

誠は實に明らかなものである。だから人の心行が誠であつたならば其の人は決してやましいところがない。己れにやましいところのないものは其の心行は必ず誠である。

又曰誠者物之終始不誠無物是故君子誠之爲貴

物事はすべて誠あるに依つて立つものである。若し誠がなかつたならば一切物事は成立たない。だから君子は常に誠をたつと水ののである。

論語曰主忠信

忠信とは忠の心の實をつくすこと、信は言葉の實を履むことである。即ち心行ひを誠實にすることを主とする。

大學曰所謂誠其意者毋自欺也如惡惡臭如好好色此之謂自謙故君子必慎其獨也

心を誠にするといふことは己れに己れを問ひて恥ぢぬやうにすること、丁度人の天性として誰でも悪い臭をいやがるやうにまた男女間相愛することを好むやうに天性となるまでにつとめるのである。これを自分で自分をうやまふといふのである。だから君子たるものは人の見て居る所見て居ない所にかゝはらず自分の心行をよくつゝしむものである。

又曰君子有大道必忠信以得之驕泰以失之

大道とは人として必ず履み守るべき大本をいふ。驕泰とはおごりたかぶることをいふのである。

君子たるものには必ず履み守るべき大本がある。真心を以てつとめて其の極致を悟り得るのである。がおごりたかぶるやうなことでは決して其の極致を悟り得ら

れるものではない。

易曰閑邪存其誠。

邪とは、よこしまなことをいふのである。即ち、よこしまなる心行ひを捨て、誠實なる心行ひを持つるといふこと。

又曰修辭立其誠所以居業也。

修辭とは言葉に鄭重にすることをいふのである。言葉に鄭重にし、心に誠を持つるといふことは、其の營むところの業を立て、よく上に大事なことである。

孟子曰反身而誠樂莫大焉。

我と我が身にかへりみて、其の心其の行が誠であるならば、實に心中楽しいものである。

又曰至誠而不動者未之有也不誠未有能動者也。

至誠とは、至極眞實なことをいふのである。

至誠天地を動かすといふことがあるが、其の如く至誠を以て事に臨んで他を感動せしめないといふことは決してない。必ず感動するものである。また其の反對に心に誠がなくして、他を感動せしめるといふことは決してない。誠ないものには感動しないのが當然である。

仁慈第九

易曰君子體仁足以長人。

君子として、仁を心にとゞめ持ち、それを實際に履み行ふならば、人の長たるに足るものである。

書曰雖有周親不如仁人。

周親とは此の上なき親しきものをいふ。此の上もなく親しい者があつても、いつくしみ深き人には及ばない。

詩曰豈弟君子民之父母。

豈弟は愷悌とも書いて、氣立のよいことをいふのである。

氣立のよいいつくしみ深き君子は、民の父母のやうなものである。

大學曰爲人君止於仁。

其の身、君主となつては、民に仁をほどこすのが第一である。

又曰爲人父止於慈。

其の身、父となつては、子をいつくしむのが第一である。

論語曰汎愛衆而親仁。

汎く衆人をいつくしんで仁の徳に近づく。

又曰君子去仁惡乎成名君子無終食之間違仁造次必於是顛沛必於是

造次とは非常にせはしい一寸した間をいふのである。顛沛もまた極僅な時をいふのである。

君子たるものが仁を捨て、名を成すことが出来ようか。仁を捨てればそれは君子では無い。君子は食事をする間も仁に違ふやうなことはしない。極僅な間でも必

ず仁を思うて忘れぬのである。

又曰當仁不讓於師。

仁をなすといふことに至つては、師といへどもこれを譲らない。

又曰苟志於仁矣無惡也。

かりにも仁に志すならば、それは決して悪いことはないのである。

書曰民罔常懷懷于有仁。

一般の人民は何でもなくさうく懐き寄るものではない。仁を施すから始めてその仁に懐くのである。

孟子曰仁也者人也。

仁を思ひ行ふといふことは人の履むべき當然の道である。

又曰惻隱之心仁之端也。

惻隱之心とは、いたはしくおもひやる心である。他をいたはしくおもひやる心を持つのは仁のはじめである。

又曰仁者無敵。

仁者とは仁人といふも同じことで、いつくしみ深き人をいふのである。仁者には敵はないものである。

禮讓第十

詩曰相鼠有禮人而無禮人而無禮胡不遄死

鼠は獸である。その獸も、ちやんと體は備へて居る。人も體ばかり備へて、禮義を辨へなければ獸と變りはない。されば人として禮を辨へずしてよからうか。人として禮を辨へないぐらゐならば、寧ろ死んでしまつた方がましである。

禮曰鸚鵡能言不離飛鳥猩猩能言不離禽獸今人而無禮雖能言不亦禽獸之心乎。

鸚鵡といふ鳥は、よく人の語を真似るものであるが、空飛水鳥であるから禮義は知らない。猩猩といふ獸は、よく人に似たものである(猩猩能言とあるは支那古代の人の想像説であるが、これも獸であるから禮義は知らない。今人と生れきたものが禮を

知らなかつたならば、それは外形のみのものであつて、其の心は更に鳥や獸と變るまい。

又曰凡人之所以爲人者禮義也。

人の禽獸などと異なつて居るといふ譯は、身體の形貌などを以ていふのではない。全く禮義を辨へて居るからである。

又曰人有禮則安無禮則危。

人は禮義さへよく辨へて居れば、その身は安らかなものである。が、それに引換へて禮義のないものは、まことに其の身は危いものである。

又曰君子貴人而賤己先人而後己則民作讓。

君子たるものが、へりくだりて、他人を貴びて自分を賤しきものとし、何事にも人を先にして己を後にすれば、一般の人間は其の德に化せられて、皆禮讓を重んずるものとなるのである。

又曰君子恭敬撙節退讓以明禮。

恭敬とは、うや／＼しくつゝしむこと。擗節とは、おさへて制限すること。退讓とは、しりぞきゆづること。即ちへりくだることをいふのである。

君子たるものは、恭敬、擗節、退讓などの徳を以て禮義を明らかにするものである。

易曰、人道、惡盈而好謙、謙尊而光、卑而不可踰。

人として履み行ふべき大本では、物の盈ちたるごとく、おごりたることを忌むものであつて、其の反對に、へりくだりたることをよろこぶものである。それで、へりくだるの徳は、まことに尊く、仰ぐべきものである。もとよりへりくだるの徳は、自分を卑くするのであるから、卑しいやうに見ゆるものゝどうして／＼なかく犯すことのできないものである。

書曰、允恭克讓。

まことにうや／＼しくつゝよくへりくだる。

大學曰、一家讓、一國興讓。

一家の内が皆禮義を重んじて相讓るならば、その一家々々の集合たる一國は、ことごとく禮義を重んずることゝなるのである。

論語曰、恭近於禮、遠恥辱也。

人のつゝしんで禮義に近づくのは、つまり耻辱をさらすといふことに遠ざかるわけになるのである。

又曰、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之内皆兄弟也。

君子たるものは、常につゝしみて過ちをしない、そして人と交るに禮義を重んじて居る。相互にかやうにして居れば、天下の人間は皆兄弟のやうなもので、まことに安らかである。

又曰、不知禮、無以立也。

人として禮義を辨へなかつたならば、決して世の中に立つことは出来ない。

又曰、能以禮讓爲國乎、何有不能以禮讓爲國、如禮何。

國を治めるのに、禮讓の徳を以てしたならば、まことによく治まるのである。それに引換へて、禮讓の徳を以て國を治めなかつたならば、一體どうなることであらうか、その國はさぞ／＼危いことであらう。

又曰泰伯其可謂至德也已矣三以天下讓民無得而稱焉。

泰伯は支那古代の王侯の子で甚だ高徳な人であつた。其の父の死するに臨んで泰伯に後を繼ぐやうにと遺言して死んだ。ところが泰伯は自分には不徳であつて到底天下を治めるの器でないからとて弟に王位を譲らうとした。が弟もなか／＼これを受けないうで兄の泰伯に後を繼いでゆくやうに勸めた。が泰伯はそれでも自分の不徳を思つて後を繼がす三たびまで押問答して遂にどこへか出て去つてしまつた。此の事實を見ると泰伯は實に高徳の至れる人であるといはなければならぬ。

儉素第十一

易曰天地節而四時成節以制度不傷財不害民。

節とは程よくすることをいふのである。四時とは四季といふと同じことで春夏秋冬をいふのである。天地の作用が程よくゆくが爲に四季の寒暖は整ふのである。人の上に於ても亦其の如くで凡ての事を調子よくするに制度を以てしたならば財寶を失ふが如きこともなく人民の困窮するやうなこともない。

書曰慎乃儉德惟懷永圖。

物事をつゞまやかに節するの徳を積みて將來の圖を心懸くべきである。

又曰克儉于家。

よく一家の入費をつゞまやかにする。

又曰恭儉惟徳。

心行ひをうや／＼しくして物事をつゞまやかにするのは人として行ふべき一の美徳である。

禮曰國奢則示之以儉國儉則示之以禮。

國民一般の風が奢侈に傾いたならば儉約の徳を示してこれを善化するべきである。そして國民一般の風が儉約に嚮うたならばそこで禮義の重きを示すべきである。

論語曰節用而愛人。

用とは費用のこと即ち入費をいふのである。入費を節約して他人を愛し徳を施すべきである。

又曰。非飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝

澹。鬼神とは、靈魂をいふのであつて、こゝでは祖先の御靈をさして言つたのである。黻冕の黻は章の膝蔽で、冕は貴人の冠である。それから轉じて單に禮服といふ義になるのである。宮室とは、家のことである。溝澹とは、田に水を入れるために設けた溝をいふのである。

自分の飲食には奢らず、極質素にして、祖先の御靈には色々の旨い物を供へてよく御祭りすべきである。また常に着る衣服は華美にせずして、朝廷に出る時に身に着ける禮服を立派にするべきである。また住家は、さして立派にすることなく、其の節した費用を投じて、自他の爲になるやうに田地に水そぐ溝を掘りて力を殖産公益に致すべきである。

又曰。麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。

麻冕とは、麻布でこしらへた冠をいふのである。今かやうに質素なのは儉の徳に叶つてゐる。自

分は、一般のする通り、此の質素な風に從はう。

孟子曰。賢君必恭儉禮下。取於民有制。

賢明なる人君は、必ず恭儉なものであつて、下を遇するに禮を厚くし、一般人民より取立つる貢物には必ずきまりを付けて酷いことは爲ない。

忍耐第十二

書曰。必有忍其乃有濟。

忍び耐へることがあつたならば、何事か必ず爲すところがあるのである。

論語曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以為己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。

弘毅とは、強く忍びこらへることをいふのである。

男子たるものは、強く忍耐しなければならぬ。其の任とするところが甚だ重くして、末の誠に遠いものである。その故は、仁を爲すのを以て自分の任とするのである。まことに任の重い譯である。そして其の仁を爲すといふことは、終生おこたるべか

らざるもので、斃れて後に已むのであるから、まことに末の遠い譯である。

又曰無欲速無見小利欲速則不達見小利則大事不成

物事を爲すに當りては速く出来さうとのみ望むべきではない。また僅な利益に心を奪はれるやうでもいけない。速く出来さうとのみ焦つては目的の處に達しないことが多い。また僅な利益に目がつくやうでは決して大事は成るものではない。

又曰小不忍則亂大謀

大きな企てのあるものは、小さい枝葉の事には拘はらぬやうにしないと、肝腎の大きな目的を遂げられないことになる。

孟子曰天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲所以動心忍性曾益其所不能

天將降大任於是人也とは、非常な大仕事をなすといふことは、多くの人のよくするところではなくて、或時代に於てのみ世に現はれるものである。それで、かやうなものは天が其の人に任を託したものであるといふ意味をいつたのである。非常な大仕事をなすには、非常な忍耐力が無くては成し遂げられないのである。先

づその心を苦しめること一通りでない。のみならず、その身を勞することも容易でない。更に餓に迫ることもあらう。困窮に陥ることもあらう。また折角わづかに成し遂げた一部の事業も脆く崩れることもあらう。かやうに萬難に遇うても、これを意とせず、志を強くし、孜孜として努力せなければならぬのである。

又曰有爲者辟若掘井掘井九軌而不及泉猶爲棄井也

九軌は九俛と書くも同じこととて九尋をいふのである。それで直に深い意味となるのである。

物事を成し遂げむとするのは、丁度井戸を掘るやうなものである。段々深く掘つていつても水が湧き出なければ、其の井戸を棄て、また他を掘りこゝろみななければならぬ。

貞操第十三

易曰恒其德貞

柔順とか静淑とかいふ徳を恆變へずを守るのを貞といふのである。

禮曰壹與之齊終身不改。

一旦その人とつれそうた上は節操を守つて一生これを改めない。

詩曰髮彼兩髦實維我儀之死矢靡他。

髮とは髪かみの垂たれてをるさまを形容する語である。兩髦とは婦人の髪を左右にわけて垂れたのをいふのである。死ぬるまで夫の爲

に操を守りてこれを變ずることをしない。

又曰我心匪石不可轉也我心匪席不可卷也。

自分の精神は石の如きものではない。それで他人がこれを動かさうとしても決して移り動かない。また自分の精神は席の如きものでない。それで他人がこれを奪ひ移さうとしても決して奪はれ移るものではない。

論語曰不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇。

涅とはおはぐろのことで物を黒く染める料である。緇は黒色のことである。

その心の堅固なることは、これを如何にするともうすぐものでない。その心の潔いことは、これを如何に汚さうとするも汚さるゝものではない。

又曰歲寒然後知松柏之後凋也。

寒さの甚しい時には、凡ての樹木は、皆葉が落ちて枯れ凋むものである。さういふ場合に松や柏の常磐にして、冬枯れしないものであることが一層よくわかる。その如くに操の正しい人の志も尋常でない場合によく顯はれるものである。

廉潔第十四

孟子曰非其義也非其道也祿之以天下弗顧也繫馬千駟弗視也非其義也非其道也一介不以與人一介不以取諸人。

千駟の駟とは、四頭の馬をかけて轅ひく車をいふので、こゝでは車馬の多いことを言つたのである。

其の事が義理に叶はず、條理が立つてゐなければ、よし天下を與へようと言つてくれなくても顧みない。また門に馬を繋ぎ、多くの車馬を整へて、如何に招かるゝとも行くこ

とではない。それであるから義理に叶はなければ微塵ほどの物でも人に與へることもなければ、また人からも取らぬ。

又曰可以取可以無取取傷廉

取るべき理由のあるものは、取るべきであると同時に、取るべき理由のないものは、決して取つてはならない。貪る心を以て取つては廉潔といふことを破ることになるのである。

詩曰不伎不求何用不臧

義理にさからはす、求むべからざるは求めず、潔くしてをれば實にうつくしいものである。

書曰簡而廉

身を處するのにつまやかにして廉潔の徳を守る。

周禮曰一日廉善二日廉能三日廉敬四日廉正五日廉法六日廉辨

廉善とは廉潔にして心行ひの善良なるをいふ。廉能とは廉潔にして技能の秀でた

のをいふ。廉敬とは廉潔にして恭敬なのをいふ。廉正とは廉潔にして心行ひの正しいのをいふ。廉法とは廉潔にして法度を正しく守るのをいふ。廉辨とは廉潔にして智識のすぐれたのをいふのである。

論語曰富與貴是人之所欲也不以其道得之不處也貧與賤是人之所惡也不以其道得之不去也

富貴は何人も之を希ふものである。が正しい道を履んで得たる富貴でなければ、久しくこれを保つことはできないのである。貧賤は何人も之を忌み厭ふものである。がこれとても、正しい道を履んで貧賤の境を脱したのでなければ、一時これを脱することを得ても、また再び貧賤に陥つて、いつまでも去ることのできないものである。

又曰不義而富且貴於我如浮雲

不義な事をして得たところの富貴は、更に希ふところでない。自分から見れば、丁度浮雲を見るやうなもので、實に果敢なく思はれるものである。

敏智第十五

易曰或從王事知光大也。

王事とは公の事即ち國家の事である。

國家の事に従ふのは智慧が大に働かねばならぬ。

中庸曰智仁勇三者天下之達德也。

智慧と仁恵と勇氣とこの三の徳は天下古今同じく得る處の理である。

又曰好學近乎知。

學問を好むといふことは、やがて智慧を得るといふことになるので、つまり智に近づくわけである。

又曰成己仁也成物知也。

自分といふものゝ徳を高め人格をつくりといふことは、仁が本である。物事を大成するといふことに至つては智慧が本である。

論語曰知者不惑。

智慧のある者は道理が明らかであるから事に當つて惑はない。

又曰聞一以知十。

或一つの事柄を聞いては、智慧ある者は道理に明るいから忽ち十の事を悟るものである。

又曰賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者。

賜とは孔子の門人で、非常に詩をよくし、而も明敏な人であつた。賜は、まことに詩が上手である。ともに詩のことを談すべきである。そして其の明智なこと一たび往くことを告げれば其の歸る時を推知する程である。

孟子曰知者無不知也當務之爲急。

智慧のある者は事に當つて知らないといふことはない。よく事の緩急本末を悟つてゐるものである。だから事を爲すに當つては先づ其の急務を知つて、工合よく處置するものである。

又曰治人不治反其智。

人を治めて見て若し治まらなければ、自分の智に反省して其當を得てゐるか得てゐないかを考ふべきである。

剛勇第十六

書曰剛而無虐

心の中に剛勇なるところを備へながら人をしへたげない。

又曰沈潛剛克

こせくせずして、暗を落付けてゐれば、おのづから剛勇になるものである。

易曰君子以獨立不懼

君子たる者は、心中一點のやましいところがなく、また暗力の据つたものであるから、人に依頼する心もなく、よく獨立獨行して、おそれないものである。

論語曰勇者不懼

剛勇なるものは、決して事に當つておそれを懐くものではない。

又曰見義不爲無勇也

眼前に義として爲すべき事を見てゐながら、己が生命を惜しんで之を爲さぬのは、勇

なきものである。

又曰内省不疚夫何憂何懼

自から省みて、心中一點のやましいところがなければ、何も憂ふることはない。また天下何物もおそれることはない。

中庸曰發強剛毅足以有執也

心剛毅であるならば、よく事を處断することができぬ。

禮曰儒有可親而不可劫也可近而不可迫也可殺而不可辱也

人に對するには、徳義を以て互に親しむべきであるが、これを切かしてはならぬ。また近しくしても、決して迫つてはならぬ。また尤めて、これを殺すことはあつても、決してこれを辱しめてはならぬ。

又曰臨事而屢斷勇也

事に臨んで、幾度でもよく處断するのは、剛勇の徳である。

孟子曰自反而縮雖千萬人吾往矣

自分に省みて、義であると思つたならばたとひ、對手は幾千萬人居ようとも決しておそれることではない。自ら進んで往いて事に當らう。

又曰何謂浩然之氣。曰難言也。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞天地之間。其爲氣也。配義與道。無是餒也。

浩然之氣とは、盛大流行の氣をいふのであつて、この氣は言にあらはして教へ示すことのできぬもので、人のおのづから體するところのものである。何を浩然の氣といふのであるか。これは言にあらはしてかうであると教へ示すことのできないものである。其の氣といふのは、至大至剛即ち初めより限量はなく、また屈し撓まぬものである。よく此の氣を養うて誤らないならば、天地の間に充ちふさがるものである。而し義と道とにこれを配せなければ、何の役にも立たぬものである。

又曰富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

剛勇にして義に勇むものは、富貴を以てこれにくらはしても、それが爲に心を動かすものではない。また如何に貧賤であつても、それが爲にさもしい心をおこすもので

は無い。更に威嚴武力を以て却かしても、それにおそれて志を變へるものではない。實にかやうなのは、大丈夫といふべきである。

公平第十七

書曰無偏無黨。王道蕩蕩。無黨無偏。王道平平。

王道とは天子の世を治める道をいふのである。王道中正を得て、かたよることなく、また黨を結びて、せめぐことなく、まことにやすらかであり、まことにたひらかである。

又曰以公滅私。民其允懷。

政を施すものが、公事の爲に私事を棄て、公平に治めたならば、民はその徳に化して懐くものである。

禮曰天無私覆。地無私載。日月無私照。奉此三者。以勞天下。此之謂三無私。

天は上にありて萬物を覆ひ、地は下にありて萬物を載せ、日月は天に在りて萬物を照

すものであるから私覆私載私照の語を用いたのである。
 天は、まことに公平なものであつて、萬物を覆ふに偏頗はない。地は、まことに公平なものであつて、萬物を載せるに偏頗はない。日月は、まことに公平なものであつて、萬物を照すに偏頗はない。此の三つの公平な徳を心の中に奉じて、天下の爲につくすのを三無私といふのである。

又曰大道之行也天下爲公選賢與能講信修睦故人不獨親其親不獨子其子

天下の大道といふものは、まことに公平無私なものであつて、ひろく天下を公として、賢者を選んで、その天下を治むる技倆あるものに天下を與へ、信義を重んじ、親睦を修めるものである。だから人たるものは、自分の親であつても、これを自分一人のための親とせず、自分の子であつても、これを自分一人のための子とせず、賢良なものであれば舉げて公のために薦めるべきである。

易曰君子以裒多益寡稱物平施

君子たるものは、公平をたつとよものであるから、多きものは、これを減し、すくなきも

のは、これを増し、物事の中正をはかつて施を平等にするものである。

論語曰君子周而不比小人比而不周

小人とは、君子の反對で、徳をつまぬ心ざまのいやしいものどもを言ふのである。周とは、あつまり至ることである。比とは、黨をむすぶことである。君子は、あつまり和しても、黨を結ぶこととは爲ない。が、小人は、黨を結ぶことをしても、決して和するものではない。

又曰母意母必母固母我

これと深く執し思ふこともなく、必ずかうと迫るべきこともなく、固く持することもなく、勿論我を立てるといふことはない。まことに公平なものである。

又曰君子和而不同小人同而不和

君子は和するが、決して雷同はせぬ。それに引換へて、小人は雷同するが、決して和しない。

又曰君子不以言舉人、不以人廢言

君子たるものは、まことに公平なものであるから己れに都合のよい言を吐いたからとて其の人を用ゐるやうなことはしない。そしてまた、つまらぬ人の言だからとて之を聴かずに棄てるやうなことは無い。

孟子曰左右皆曰賢未可也諸大夫皆曰賢未可也國人皆曰賢然後察之見賢焉然後用之左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可勿聽國人皆曰不可然後察之見不可焉然後去之。

左右とは、自分の左右に居る人といふことで、近侍の臣をいふのである。諸大夫とは、大勢の役人どもをいふのである。近侍の臣が口を揃へて賢者であると推舉することがあつても、直ちに信用すべきでない。また大勢の役人どもが口を揃へて賢者であると推舉しても、まだ直ちに信用すべきでない。國人一般が賢者であると推舉したならば、そこで始めて、これを考へて實際賢者であることを見届けた上で、これを用ゐるべきである。また其の如く近侍の臣どもが口をそろへて、よくない者であると、おとしめることがあつても直ちにその言を信用すべきではない。更に大勢の役人どもが、口をそろへて、やはりよろし

くない者であると言つても、猶その言を信用すべきではない。さて、國人一般が、よろしくないものであると言ふのを聞いて、そこで始めて、よく／＼考へて、實際そのよろしくないことを見届けた上で、これを退けるべきである。

度量第十八

書曰其心休休焉其有容人之有技若己有之人之彥聖其心奸之不善者亦其口出是能容之以保我子孫黎民亦職有利哉。

休休とは、憂ふることのなき貌にいふ語である。彥聖とは、すぐれて賢いことをいふのである。黎民とは、多くの人民といふこと。心に憂ふることなく、極やすらかにして、よく人を容れるやうにすべきである。技能ある人あらば、これを用ゐて、丁度自分に技能のあつて、働くやうに、其の人を動かした極めて賢い人あらば、心から之をよみして用ゐる。そして、これも一通りに用ゐるのみではなくて、よく之を我が度量に服せしめて容れるやうに、しなくてはならぬ。かやうにして、我が子孫または多くの人民を治めてゆくのは、實に下を治める上に於て、非常な利益である。

中庸曰辟如天地之無不持載無不覆幬。

持載とは、さへ持つて載せること。覆幬とは上からおほふことをいふのである。人の度量の廣いことは、丁度地の萬物を載せて一物をも餘さず、天の萬物をおほひて一物をも餘さぬやうにすべきである。

又曰寬裕溫柔足以有容也。

寬裕とは、寬大といふのと同じことで、心のゆたかにして、ひろいことをいふのである。溫柔とは、おだやかにして、やはらかなことをいふのである。心ゆたかにしてひろく、おだやかにして、やはらかであれば、よく人を容るゝことができる。

論語曰伯夷叔齊不念舊惡怨是以希。

伯夷叔齊は、ともに殷の諸侯孤竹君の子で、伯夷は兄、叔齊は弟である。二人ながら清廉の士で、父の志に従うて家を仲子に譲り、後に周の武王のなす所を非として共に首陽山に登つて死んだ。伯夷叔齊の二人は、まことに心のひろい人で、少しも舊惡などを思ふことなく、故に怨

などが更におこらぬ。

又曰君子不可小知而可大受也。小人不可大受而可小知也。

君子たる者は、わづかなる事に氣の付くやうな、小さい智識はないが、よく人を容れるところの度量はある。これと反對に、小人は人を容れるところの度量は無く、こせこせしたことに智慧のまはるものである。

又曰君子尊賢而容衆。嘉善而務不能。

君子たるものは、賢を尊んで、よく多くの人を容れ、善をよみして、能なきものをも勵ましつとめるものである。

又曰寬則得衆。

心がゆるやかであつたならば、多くの人は皆これに懐き寄るものである。

識斷第十九

書曰惟克果斷乃罔後艱。

物事の道理をよく察して、處斷したならば、決して後に禍をおこすものではない。

又曰視遠惟明。

物事の將來如何を察するのは、事理に明らかなる智識によるのである。

易曰幾者動之微。吉之先見者也。君子見幾而作。不俟終日。

幾とは物事のきざしをいふのである。

物事のきざしは、將來に現はるべき結果に對する原因であつて、幸のまづ現はるゝ始めともいふべきである。君子は、よく物事のきざしを見て事を行ふものであつて、而も其の事を行ふや、非常に機敏なものである。

又曰君子知微知彰。知柔知剛。萬夫之望。

微とは、極こまかい、かすかなこと、をいふのである。彰とは、微の反對で、いちじるしいことをいふのである。萬夫とは、大勢の人間をいふのである。

君子たるものは、極こまかい、かすかな事を知り、また、いちじるしいことを知り、やはらかな事を知り、たけくしいことも知つて、まことに隙目のないものである。それで萬人の仰ぎ望むところである。

又曰君子藏器於身。待時而動。

君子たる者は、何時如何なる事に當つても、直ちにそれに應ずるだけの身に智識をそなへて居つて、いざといふ場合には、何時でも之に應じてよく處斷するものである。

勉職第二十

易曰君子終日乾乾。夕惕若。

乾とは、よくつとめることをいふのである。惕若とは、おそれつゝしむ貌をいふのである。

又曰王臣蹇蹇。匪躬之故。

王臣とは、君主に仕ふる者、即ち臣下をいふのである。蹇蹇とは、もと足のあゆめない貌をいふのであるが、轉じて物事に難み苦しむ貌をいふ。こゝでは、一生懸命に君王の爲につかへることをいふのである。

臣下となりては、君王の爲に一生懸命につとめるのである。そして、これは自分の爲にするのでは無い。皆君王の爲にするのである。

詩曰黽勉從事。不敢告勞。

黽勉とは、つとめはげむことをいふのである。
つとめはげんで仕事をして、少しもつかれを告げない。

又曰嗟我農夫我稼既同。上入執宮功。晝爾于茅宵爾索絢。亟其乘屋。其始播百穀。

稼とは、耕作のことをいふのである。上入とは、官に上ること。宮功とは、上納即ちみづきものをいふのである。索絢とは、繩を絢ふこと。百穀とは、諸種の穀物をいふのである。此の章に農夫の業にいそしむことをいつたのである。耕作の事は、もはや終つたから、みづきものを官に上れ、さて晝は、野山に行つて茅を刈れ、夜は繩を絢へ、そして家の屋根を葺きつくろへよ。さてまた、諸種の穀物の種を播いて耕作の事を營まう。

書曰惟日孜孜無敢逸豫。

逸豫とは、あそびたのしむことをいふのである。毎日々々一生懸命につとめて、更に遊びたのしむことをしない。

又曰夙夜罔或不勤。

朝から晩まで毎日々々一生懸命つとめる。

又曰業廣惟勤。

己がなす業のひろく行届くのは、よくつとめるからである。

論語曰居之無倦行之以忠。

自分の職には決して倦まない。そして其の事を行ふには、まめしく、よくつとめる。

又曰先之勞之請益曰無倦。

一生懸命仕事につとめて利益を得ようとするには、どうすればよいか、それは、倦まず、挽ますつとむべきである。

又曰陳力就列。

力一ばいつとめて、よく其の職を守る。

幼學綱要漢文解 終

宮內省御藏版

302
68

大正五年三月十日發行
大正十五年八月五日再版發行
昭和十年三月五日五版印刷
昭和十年三月十日五版發行

幼學綱要 漢文解

東京市京橋區京橋二丁目十一番地

吉川弘文館編輯部

著者

東京市京橋區湊町三丁目八番地一

高橋印刷所

印刷所

不許
複製

東京市京橋區京橋二丁目十一番地

株式會社 吉川弘文館

發行所

電話京橋一四一番
振替東京二四四番

終

